



改めて告げた。

「魔法を、解いてほしい」

マリーは静かに頷いた。

手を出してくださいと言われ、机越しに差し出す。

白く小さな手が、僕の手をそっと包んだ。

「すぐにはじめますね」

「なんだか、まだ君が魔女だっていう実感がないな」

「姿も形もそのままですから」

「うん、本当に」

震えている僕の手気づいたのだろうか。

目の前の魔女は美しく笑ってから、言った。

「きっと、大丈夫ですよ」



目を閉じて集中する。

彼の中を巡っている魔力を吸い取る感覚、自らの体に入ってくる別の魔力を自分のそれで上書きして――。



熱い。

体の内側から熱が上がって行って、私を蝕^{むしば}んでいく。

思わず眉間にしわが寄った。

熱さに包まれる中、スマレの手だけはあたたかくて。





彼を救いたい。
ただ、その一心だった。



マリーの体が光ったり、僕の体が熱くなったりすることは
なかった。
ただ、重ねられた手はあたたかくて。

「これで魔法は解けたはずです」

息を細く吐き出したマリーは言う。
彼女を疑っているわけではないが、あっさりとしすぎてい
て、実感がわからない。
確かめるには、自身を傷つけるのが手っ取り早い。
僕は立ち上がり、調理台にあったナイフを指に押し当てた。
薄い痛みと共に、赤い筋が入る。
——治らない。
血は少しずつ流れ出し、赤い球を作る。
その様子をじっと見ていた。
マリーは静かに席を立ち、包帯を巻いてくれた。

「もう、無茶しないでくださいね」

「はは。本当に、そうだね」

「……あれ、私、どうしてこんなところにいるんです
か？」





それは、突然のことだった。

「マリー？」

「ごめんなさい、さっきまで私、スマレに包帯を巻いて…
…。あれ？」

「君は僕の魔法を解いてくれて——もしかして記憶が？」

「魔法を解いて、代償……ええと、そうですね。私、スマレの魔法を解いたんです」

確かめるようにマリーは言う。

「ごめんなさい、なんだか記憶が曖昧で」

「……僕のほうこそ、ごめん」

「どうしてスマレが謝るんですか」

「だって僕の魔法を解いたから、マリーの記憶が」

「魔法を解くと決めたのは私もです。気にしないでください。それで、これからどうするんですしたっけ」



「……君は、魔女になった。魔女の使命を果たす旅に出るんだ」



「そうでした。スマレはどうしますか？」

「マリーと行くよ。魔法のない僕では、君の力になれないと思うけど」

「そんなことはありません。私はもっとスマレのご飯が食べたいし、絵だって見たいです。それに、なによりもスマレが傍にいてくれたらうれしいです」

マリーは笑う。





あの山崩れが起こった夜も、君はこんな顔で笑っていたの
だろうか。

それほど時は経っていないのに、遠い記憶のようだ。

「行きましょう」

「ああ」

そして、僕たちは旅立った。



低い木造の家が立ち並んでいた町は都市となり、石ででき
た家々が並んでいる。

電気というものが発明され、火の明かりはそれらに変わっ
ていった。

時代は、進んだ。

「巨匠スミレの個展が開かれるらしいよ。今回は『魔女シ
リーズ』も飾られるんだって」

「昔、存在した魔女を描いたものだけ？ 見にいこう」

そんな声が聞こえてくる。

私はスカートの裾を翻し、石畳を歩いた。

目的地は、先ほど話していた人たちと同じだ。

「個展のチケットはこちらで販売しています。ようこそ」

「大人一枚で」





「大人……ですか？」

受付の人は私を頭からつま先まで確認する。
私の姿はあの日から変わっていないから、当然の反応だ。

「大人一枚」

「か、かしこまりました」

念を押すように伝えると、慌ててチケットを渡される。
私はそのまま、会場を進んだ。

あれから、スマレと共に旅に出た。
彼は行く先々で絵を描き、それを売り、やがて名を馳せる
ようになる。
魔法を解いた代償として記憶の維持がしにくくなった私は、
彼の絵を記憶の頼りとして過ごした。
私は、スマレに支えられていたのだ。

晩年まで描き続けた彼の絵は膨大な量となった。
私一人では保存しきれず、数枚を手元に残して、美術協会
へ託した。
そうして評価された彼の絵は、定期的に個展が開かれるよ
うになったのだ。

スマレの絵はいつの時代でも人気だ。
それがうれしくて、個展が開かれるたびに訪れた。





「スマレ。私って、こんなに美人ですか？」

スマレが遺した『魔女』シリーズは、私が描かれている。
あれはとある町を訪ねたときの絵。
これは山の中で人助けをしたときの絵。
絵を見るごとに、そのときの思い出がよみがえる。
記憶が曖昧になっても彼の残してくれた絵があるから、私
はずっと、覚えていられた。

絵画を眺めていると、隣にやってきた子どもが私をじいっ
と見つめてくる。

「あの人、絵にそっくりだ」

その子は私を指さした。

「美術館では静かにね」

唇に人差し指を当てて、ウィンクを送る。
それから、再び歩き出した。
もうスマレはいないけれど、彼の遺した絵がある限り。
スマレは私とともにある。

ED4 【色褪せない絵画】

